

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

ツマグロヒョウモンの命と向き合う／社会福祉法人任天会 日野の森こども園（兵庫県）

日本には様々な生き物が共存しており、地域によっても子どもたちが関わる対象は多種多様ですね。

今回は、身近にいたツマグロヒョウモンをクラスで飼育し、命の循環について子どもたちが向き合い考えていく事例をご紹介します。天蓋を作り飼育するなど可視化の工夫を重ね、子どもの興味・関心を引き出しています。



● ツマグロヒョウモンと命の循環／5歳児

✦ 5月上旬～中旬 ツマグロヒョウモンとの出会い

連休明け、ツマグロヒョウモンの幼虫を5歳児クラスで飼うことになった。幼虫は次々とサナギからチョウになり子どもたちの注目を集めた。室内に取り付けた天蓋の中にチョウを誘導する。初めての経験だった担任と子どもたちは、チョウが口吻（こうぶん）を伸ばして蜜を吸う様子を表情で真似たり、「前足で味を感じるんだって。だから足にチョンチョンって触ってあげると甘い蜜に気づきやすいんだって」と餌やりのコツを調べたりして伝え合った。



✦ 6月上旬 サナギになる瞬間

ビオラの茎にぶら下がった幼虫が体をくねらせている。Aちゃんが、「幼虫がサナギになろうとしているよ！」とクラスに呼びかけみんなで観察する。飼育ケースの周りで頭を突き合わせながら脱皮の様子を食い入るように見ている。脱皮を終えた個体を見て、「なんか色が違う」「キラキラしてないね」と今まで見たサナギと比較し気づいたことを話す。30分もすると体が乾き始め、きらめきも目立つようになった。「蛹になってきた」「さっきより茶色い」「キラキラしてる」4、5歳児は観察しながら飼育ケースの様子を見に行く姿も見られた。



✦ 6月中旬 表作り

子どもたちのツマグロヒョウモンへの期待感は加速していった。屋上庭園に行きパンジーやビオラの花壇を覗き、葉をかき分けて幼虫を探す。日々幼虫は増えた。Aちゃんは「今何匹?」「何匹になった?」と正確な数を知りたくて何度も保育者に確認をする。そこで“ツマグロヒョウモンの表作り”を試みるようになった。

子どもたちは幼虫の絵を描く係、文字をなぞる係など自分ができることを考えて参加する。“羽化したらチョウマークを貼りたい”と子どもたちは折り紙をチョウの形に切り、すぐに貼れるよう準備した。



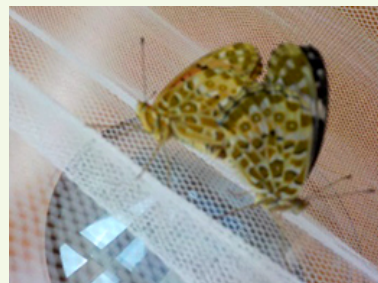
3歳児の子どもたちも表を見るようになり羽化に興味をもち始めた。その後も「お腹すいたって言うてる。ご飯取りに行こうよ」「うんこだらけ。おうちが汚いよ。綺麗にしてあげた方が気持ちいいよ」と世話をしたりサナギになった日付を書いたりする。

途中、幼虫が飼育ケースから出て廊下を這っていたり、ペットボトルから出ようとしてやめたのかラップを固定している輪ゴムにぶら下がりサナギになったりしていた。子どもたちはサナギになったことに気づくと、壁に貼り日にちも必ず書いた。そして羽化したらチョウの絵と共に日にちを追加していった。

5歳児の子どもたちは書いた日にちを見ながら、「先にサナギになったのに何でこっちは遅いのかな？ すごく元気に生まれたいからゆっくりなのかな？」と時の流れを感じていた。一方4歳児は、羽化したのかしていないのかを気にして確認していた。

✦ 7月上旬～中旬 交尾と産卵

天蓋で飼育していた蝶が天井近くでくっ付いているのを子どもたちが発見する。子どもたちは「交尾してるの？」と騒ぎ、他の子どもたちも集まってくる。その後一匹のチョウチョがポーチュラカの葉のあたりで低空飛行。Dくん「何かメスのお尻に卵が見えた！」と言う。子どもたちが様子を見てみると、蝶は体をJの字のように曲げて葉に生み落とそうとしているがうまくいかない様子だった。子どもたちは、「うまく産めないのかな」「苦しいのかな？」と様子を見守っていた。



その後夕方、天蓋掃除をする保育者の手に止まり産卵した。そっと指で掻き出すようにしたらやっと産卵したほど難産だったようだ。

翌日、保育者から様子を聞いた子どもたちは生まれるまでの期間3日間を楽しみに待った。その後もポーチュラカだけでなくカーテンにもたくさんの卵が付いており虫眼鏡で観察していた。

✦ 7月下旬 死を感じる

サナギの中には羽化できずに死んでいく個体もいた。色がどんどん黒くなり日にちだけが過ぎていく。Aちゃん、Cちゃんは生まれてこないサナギが黒くなっていることに気づき「死んじゃったのかな」「この子も黒くなってる」と言葉にする。その後黒くなったサナギを集めてお墓を作った。その他にも羽化した時に飛べない個体やサナギの殻をうまく脱げない個体などにも出会い、子どもたちなりに甘い蜜をあげてみるなど助けたいという思いで動いていた。



✦ 8月上旬 「悲しいの…」と繰り返すAちゃん

卵から生まれた幼虫の赤ちゃんが飼育ケースから逃げ、床で踏まれて死んでいた。気が付いたAちゃんは「悲しいからサークルタイムでみんなに言いたい」と言う。サークルタイムの初めにみんなに伝える。

✦ 保育者の思いとその後

ツマグロヒョウモンの幼虫が子どもの目にもはっきりと分かるようにサナギになり羽化し、卵が生まれ幼虫になり保育室の中で命が巡った。このような命の循環に立ち会うことすべてが一人一人の中にあるいろいろな形でセンスオブワンダーのような「科学する心」を育てたのではないかとと思われる

その後、ツマグロヒョウモンの絵を描いた。描き足りない子どもは大きな画用紙に描いた。ツマグロヒョウモンは子どもたちの生活や遊びの一部となり愛すべき存在として子どもと共にいた。そのことが子どもたちを育てたのではないだろうか。

